

《臨床研修医に求められる蘇生のエッセンス》

1. 蘇生開始の判断

心肺停止の診断においては、身体所見が最も重要である。現実に呼吸循環の生命徴候を確実に取れることがまず必要である。これに基づき、蘇生を始める必要性を判断でき、行動に移すことができなくてはならない。病棟において、蘇生を起動したときの具体的な手順(緊急コールのコード、救急カートや除細動器の位置など)は熟知している必要がある。さらには、経過や病態から心肺停止のリスクを読み取る能力を養うことも重要である。

2. 一次救命処置のエッセンス

BLS アルゴリズムを理解して、アルゴリズムに沿った手順を再現できるようにはならなくてはならない。特に手技に関しては、胸骨圧迫の重要性を知っていることと、正しい手技が実施できなくてはならない。これには確実な胸骨圧迫ができるように、ベッドが柔らかければ看護師と協力して背板を入れたり、およそ2分おきに胸骨圧迫を交代するといったチーム蘇生を推進する能力も含む。

3. 電氣的除細動の適応と重要性

電氣的除細動の重要性を具体的に述べるとともに、心肺停止の際のリズム(心室細動、脈なし心室頻拍、脈なし電気活動、心静止)をすみやかに確実に診断できなくてはならない。このためには、脈拍の触知やモニター心電図の判別ができなくてはならない。これをもとに、電氣的除細動の適応を判断し、確実に安全に電気ショックを与えることができなくてはならない。

4. 現実に役に立つ気道管理

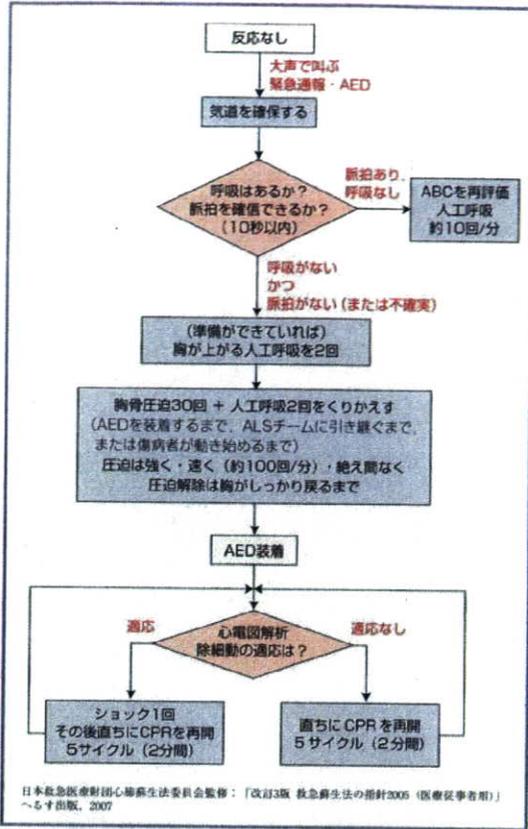
気道管理については、状況と自分の技能に応じた気道管理の方法を選択し実施できることが重要である。したがって、手術部で全身麻酔の患者に気管挿管ができるからといって、蘇生の場面で必ずしも適応になるとは限らない。現実には、バッグ・バルブ・マスクによる気道管理が極めて有用であり、基本手技として十分に習熟しておかなければならない。少なくとも気道管理の方法の2種類に習熟しておくことが求められる。

5. ALS アルゴリズムと心肺停止原因へのアプローチ

研修医は、ALS アルゴリズムを理解して、シミュレートできなくてはならない。ALS アルゴリズムにおいては、心臓のリズムに沿った蘇生のプロセスだけでなく、心停止の原因となった病態へのアプローチに取り組む必要がある。しかし、いったん心肺停止に至ると、生体反応によってもたらされる重要な情報が一挙に失われるので、多くの場合、原因検索は容易でない。蘇生のプロセスの初期段階から、心肺停止の原因となる病態や疾患へすみやかにアプローチするためには、突然の心停止を引き起こしやすい疾患や病態を頭に入れておく必要がある。そのためには心停止の原因となる4H4T(ALSアルゴリズム参照)を記憶して、説明できるようにすることが有用である。

(平出 敦、森本 剛)

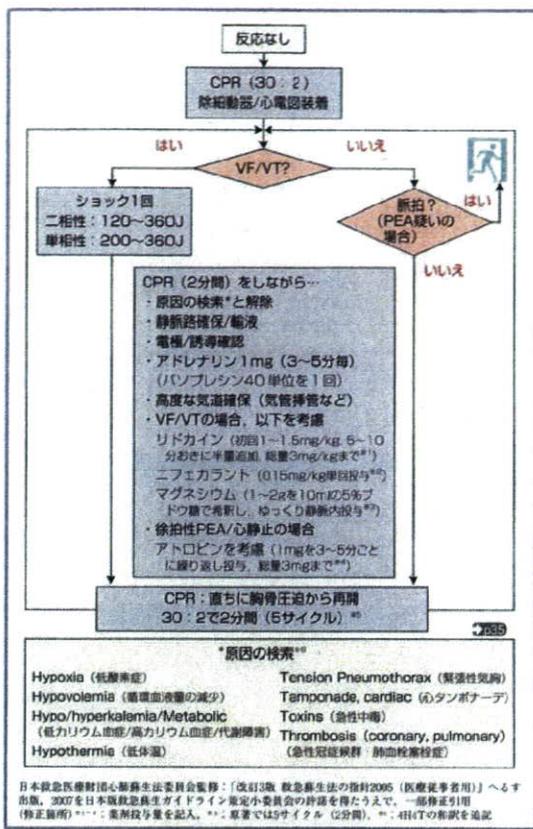
図1 BLS アルゴリズム



主に日常的に蘇生を行う者のためのBLS (成人)

(改訂第2版 日本救急医学会ICLSコースガイドブック
ク 羊土社 P29)

図2 ALS アルゴリズム



成人のALS

(改訂第2版 日本救急医学会 ICLS コースガイドブック
羊土社 P31)